

第4回 市民と市長のふれあいトーク 報告書（要点）

日 時：平成30年12月19日（水）午後7時から9時

会 場：市役所812会議室

出席者：居宅介護支援事業者（ケアプランたいじゅ、武蔵野市福祉公社）、訪問介護事業者（SOMPO ケア武蔵野訪問介護、NPO グレースケア）、通所介護・通所リハビリ事業者（高齢者在宅サービスセンター 武蔵野館、北町診療所）、訪問看護・訪問リハビリ事業者（武蔵野赤十字訪問看護ステーション、吉祥寺南病院）、介護老人福祉施設（さくらえん、とらいふ武蔵野）、武蔵野市医師会各代表者 計11名

傍聴者 6名

市長、健康福祉部長、地域支援課長、地域支援課職員1名、市民活動担当部長

1 開会

2 意見交換

（1）在宅医療・介護連携推進事業の成果と課題について

- ・入院から在宅に移行する際の連携方法を研修等で議論しているが、顔を合わせて話をすることが大切だと実感している。
- ・医療と介護で協力し、入院の際に一枚で患者の情報を共有できる書式を作成した。
- ・ノートや記録を作成して連携しているが、細かい報告・連絡・相談をできる点が成果。今後も連携を継続するためには、情報共有にタイムラグがあるので、それぞれの事業者の環境整備が必要だと思う。
- ・メディカルケアステーション（以下「MCS」とする。）という医療者のための非公開 SNS を使って連携を進めている。地域や職種によって利用率に差がある。また、事業所や病院によってはセキュリティの問題で使えない場合がある。
- ・MCS は、医師がグループを作り、薬剤師やケアマネージャー等の関係者を招待するシステムだが、グループを増やしていくことが重要。
- ・MCS は日々新しい情報が更新されていくので、病状の把握がしやすく、医療以外の情報も伝えやすい。一方で、連携先だけでなく、連携ツールも増えている。一つに統合できれば良いと思う。
- ・医師に対するハードルが課題の一つだと考えているが、MCS を使えばハードルが下がる。
- ・MCS の導入によって、情報がすぐに入ってくるようになった。指示書等の医療的ケアに入るために必要な手続きを電子化するとさらに簡素化できるのではないか。
- ・文書がないと動けないという現実がある一方で、医師が書かなければならない文書の量が多く、時間がかかる。
- ・MCS の利点として、訪問看護や在宅介護の事業者から医師に患者の生活背景

を伝えられる点がある。

- ・改善のために誰が旗振り役になるのかを決めないと、連携は進まないのではないかと思う。
- ・MCS の導入により、正確な情報のやり取りができるようになった。
- ・病院勤務のスタッフは多いため、MCS の使い方が伝わりにくい。かなりの熱量を持って使い方を伝達しなければ普及しない。
- ・病院内の連携も課題である。また、一定以上の年代の看護職は在宅介護等との連携を学校で取り扱わなかった人が多い。
- ・院内の連携ができていないと、院外との連携も難しい。職場環境の改善が必要。
- ・ショートステイは特に他の事業所との連携が難しい。専門職相談員を増やし、外部との連携を工夫している。
- ・他の事業者と協力をいただいて施設の研修を実施した。一方で、施設の入所者がけが等で病院に行く際は職員が付き添うが、病院によっては職員が長時間付添い、施設が手薄になってしまう。
- ・成果としては、入退院支援のシートや ICT 連携、専門職からの相談を医師につなぐシステムが挙げられる。多職種連携の研修会に参加した人が、各事業所に持ち帰って共有する必要がある。将来的には、医療職や介護職だけでなく、地域の方との連携も必要になるのではないかと思う。

(2) 看護小規模多機能型居宅介護と地域包括ケア人材育成センターへの期待と課題

- ・看護小規模多機能型居宅介護事業所（以下「看多機」とする。）は市の中央部分に位置しているため、市内全域の方が利用しやすいのではないかと考える。地域包括ケア人材育成センター（以下「人材育成センター」とする。）は面白い試みだと思ふ。
- ・在宅での看取りの際も、看多機とつながっていれば、ヘルパーや看護師に連絡が取れるのでご家族の不安がなくなると思ふ。また、ICT やロボットの医療・介護分野への活用を、市を挙げて取り組めると良いと思ふ。
- ・看多機は、事業者の選択肢が増えて良いと思ふ。人材育成センターはすぐに働ける人向けだと考える。介護職が 10 代のやりたい仕事として挙げられるようになる必要があると思ふ。
- ・遠方の事業所を利用しなければならない利用者もいるため、看多機という選択肢が増えることは良いと思ふ。人材育成センターが若い人材の育成の足掛かりになれば良いと思ふ。
- ・人材育成センターで武蔵野市だからこそできる人材育成が出来るのではないかと考える。介護職も医療に関する知識や医師との連携を強化する必要がある。
- ・利用者は住み慣れた地域で生活したいという方がほとんどなので、看多機が選択肢として増えるのは良いことだと思ふ。夜間のフォローやショートステイは、ご家族の負担軽減につながると思ふ。
- ・看多機は柔軟性もあり魅力的。訪問看護を行う看護師が少ないため、人材育成センターを通じて増えると良いと思ふ。

- ・選択肢が市内に増えるのは良いことだと思うので、期待している。説明する医師や相談員が看多機を安心して勧めるために、具体的にどのようなことができるのかを事業者にも伝えてほしい。
- ・看多機がどのような施設なのかを市民や事業者に伝える必要がある。若い世代へのアプローチとして人材育成センターが役立つのではないか。
- ・看多機は地域住民の期待に応える良いモデル事業になるのではないか。人材育成センターで外国人向けの支援をすると良いのではないか。
- ・看多機は在宅医療を支える大きな要になると思う。メリットとしては1つの施設の中でリハビリや介護、看護ができることが挙げられる。課題として、看多機を利用するためには、利用者がそれまで担当していたケアマネジャーを変えなければならない点がある。人材育成センターで多様な世代が研修を受けられる点は良いと思う。

3 閉会